



静と動、両義性のバランスを統合した、“同心円的キャリア”の秘密

小椋 佳氏

作詩家・作曲家

KEI
OGURA

東京大学法学部卒業後、日本勤業銀行（現・みずほ銀行）に入行。本店財務サービス部長・浜松支店長等を経て1993年退職。94年東京大学法学部に再入学。2000年文学部大学院で修士号取得。また、入行当初から音楽家としても活躍。アルバム「彷徨」は100万枚のセールスを突破。布施明氏、中村雅俊氏、堀内孝雄氏、美空ひばり氏等、多数のアーティストへ作品を提供。その音楽活動は、ミュージカルや独自の音楽劇「歌談の会」などに及ぶ。還暦を越えてもなお精力的に創作活動、若手の育成に励む。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、広重隆樹
Text = 広重隆樹（48～50P）
大久保幸夫（51P）
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

作詩家・作曲家としての小椋佳氏の名声を不動のものにしたのは、1975年、彼が初めてプロの歌手に楽曲を提供した「シクラメンのかほり」ではなかったろうか。いまあらためて聴くと、叙情性豊かなメロディもさることながら、歌詞のもつ美しい陰影に驚かされる。小椋佳氏はなにより言葉の人である。

小椋佳氏 キャリアヒストリー

1944年	0歳	東京上野黒門町に5人姉弟の長男として生まれる。本名、神田紘爾
1959年	15歳	都立上野高校入学。この頃から作曲を始める。哲学書を読みふけることもあった
1963年	19歳	一浪後、東京大学法学部入学
1965年	21歳	寺山修司氏が担当していた深夜放送で自作の歌を歌う機会を得る
1967年	23歳	日本勧業銀行（現・みずほ銀行）に入行。音楽業界のディレクターと出会う
		 <p>銀行員の仕事にも一生懸命打ち込み、充実した日々</p>
1970年	26歳	企業派遣留学生として渡米。渡米中にファースト・アルバム「青春～砂漠の少年」が発売
1971年	27歳	米国より帰国。日本勧業銀行と第一銀行が合併し、第一勧業銀行誕生。兜町支店に転属
1972年	28歳	3枚目のアルバム「彷徨」を発表。100万枚を超える記録的なロングセラーとなる
1975年	31歳	布施明氏に作品「シクラメンのかほり」を提供。同曲が日本レコード大賞を受賞
1976年	32歳	NHKホールで初コンサートを開催
1983年	39歳	梅沢富美男氏に提供した作品「夢芝居」がレコード大賞作詞賞を受賞
1986年	42歳	美空ひばり氏に作品「愛燦燦」を提供。小椋佳ファミリー・ミュージカル「アルゴはじめての冒険」上演
1991年	47歳	支店長として浜松に赴任
1993年	49歳	銀行を退職
1994年	50歳	東京大学法学部に学士入学。初の全国コンサートを開始
1996年	52歳	東京大学文学部思想文化学科哲学専修課程に学士入学
1998年	54歳	東京大学大学院（哲学）に進学。2000年修士修了。歌と語らいで綴る公演を「歌談の会」と称し、その後、年間を通して全国各地で開催
2001年	57歳	胃がんが発覚し、胃の4分の3を摘出
2006年	62歳	約9年ぶりとなるフル・オリジナル・アルバム「未熟の晩鐘」をリリース。全国公演を開催

歌は日記を綴るようなもの

2つのキャリアを同心円的に包み込む

しかし、小椋氏が紹介されるときはたえず、「東大法学部出身の歌手」「二足のわらじを履くエリート銀行員」といった惹句が引用されることが多かった。優れた作詩家・作曲家であるという評価とともに、彼の異色のキャリアは、デビュー早々から人々の好奇心の的だった。

「二足のわらじという意識は私にはありませんでした。そもそも銀行員の仕事は忙しく、年間で均せば2000時間はそれに費やしていました。一方、私が曲をつくる時間は、1曲につき約3時間です。平均して年間50曲ほど作曲していましたが、たかだか150時間から200時間。二足のわらじというのがおこがましいぐらいです」

単に時間の対比だけの問題ではない。そもそも彼にとって、曲や詩を書くことは「日記を書くようなもの」であり、ものごとを感じ、思惟する日々の自分を確認する術だったのだ。

「自分の個を中心におけば、その周りに自分の歌の世界がある、さらにその外側に銀行員としての仕事や生活のもろもろがある。それらはすべて自分を中心に同心円状に広がっていて、相矛盾する対立項ではないのです」

それを裏づけるように、都心の支店開設の準備委員に任命され、朝の5時から深夜まで猛烈に働いていたとき、作曲数は年間100曲にも及んだ。銀行員としての仕事に注ぐエネルギーが相乗効果として表れ、楽想が豊かになる。この2つの力強い生命活動によって、同心円の径は拡大していくのだった。

人が生きるとは、

他人のモノマネではない価値を生み出すこと

小椋氏は1944年、東京の下町の料理屋の長男として生まれた。本名は神田紘爾という。

「父は若い頃は琵琶の師範で、美声の持ち主でしたが、

商売をするようになってそれを封印していました。まじめで苦勞性で口下手、お客さんに挨拶することもできなかった。一方、母は俗にいう江戸っ子気質。陽気で、社交的で、芸事が大好き。ちょっと無鉄砲で、危なっかしいところもありました」

父の琵琶語りは、直接的に小椋氏の音楽的感性の一部を形成している。母親の芸事好きも無関係とはいえないだろう。また、この両親には“静”と“動”という相反性があった。26年の間まじめに銀行員という仕事をやり続けた姿と、その間も、そして現在に至るまで大胆な手腕で華やかなステージを演出する姿。小椋氏のその両面にそれぞれの影響を見ることができる。

小椋氏は幼い頃祖母に言われた。「おまえはいい顔をしている。一生食うには困らない顔相だね」と。「その言葉通りの人生でした。幸い、食べるために仕事を選んだことが私にはない。銀行員としての仕事も音楽も、私にとっては食べるためではなく、自分の人生の価値を実現するための方法だったのです」

その価値とは何だろうか。「人が生きるということは、他人のモノマネではない創造性を生み出すことだ」と小椋氏は言い切る。

中学校から高校時代にかけて、病的なまでに生や死の意味、自己や他者の存在を問いつめ、哲学的な不安に悩まされたことが小椋氏にはある。「形而上の泥沼に浸かって、首から上、つまり観念だけで生きていたようなもの」だったという。

まだ十代の未熟な哲学的思考が、その後の人生をすべて形作るわけではないが、何事にも論理と倫理の根源に



一度立ち戻って考えるというのは、その後の小椋氏の習いともなった。

アウトサイダー＝インサイダーとして生きること それが自分の創造性だ

「大学を卒業し、社会に出るときにもかなりの葛藤がありました。当時の東大法学部卒業生は、官庁や大企業に入り、社会の中核で力をもつというのが一般的。それは『組織の中で生きる』というインサイダーとしての生き方です。しかし、僕自身、学生時代の終わりには芸術家やその卵たちとの交流も生まれ、社会の外側からものを見る、アウトサイダーへの憧れがあった。結局、私が選んだのはどちらかに偏るのではない生き方でした」

「銀行員として金融資本主義の中核に入り込み、組織の中できちんと評価されるサラリーマンになろう。しかし、同時にアウトサイダーとしての自分もけって失うつもりはない。自分はそういうスタンスをとる。それが僕のオリジナリティだ」と、卒業コンパにおいて、同級生達の前で、そう宣言したという。

実際その通りになった。シンガーソングライターとしてのデビューは幸運だったともいえる。しかし、銀行員として組織の中にありながら、音楽という芸術を通じて表現し続けるという生き方は、計画的に生み出されたもののように思える。

インサイダー・神田紘爾と、アウトサイダー・小椋佳という両義性。あるいはシーソーのような不均衡。それを絶妙なバランスで保ちながら、より高次のレベルで統合することこそが、彼にとっては他人のモノマネではない、創造的な生き方だったのだ。

93年、50歳という区切りを目前にして銀行を退職する。「組織人としては見るべきほどのことは見つ」という達観がそこにはあった。そして、組織内人間としての発信に終止符を打つ。

しかし、振り子は音楽活動を中心としたアーティスト生活にふりきれなかった。かつての哲学少年は、「学び残したことがある」「若いときの哲学的な悩みを解決しておきたい」との思いから、大学に再入学する。ここにも、一方の極に偏らない小椋氏ならではのバランス感覚、絶えず交差する複数の同心円を抱え込みながら、人生の根源に迫ろうとする独自の方法论が垣間見える。

■ 小椋佳氏のキャリアをこう見る

日常生活がそのまま表現になる 一貫性を維持した「自己表現的」人生

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

小椋氏が紫煙をくゆらせながら言葉を選んで語るようすは、まるで哲学者か法律家のようなのだ。もちろんそれは小椋氏が東京大学で法学と哲学を学んだことと無縁ではないのだろうが、もともと言葉に対する思いが強く、緻密に、かつ繊細に向き合ってきたから、法学や哲学に興味を持ったという順序なのかもしれない。

彼は「歌を語る」という言い方を使うが、まさしく語りを真ん中に置いた音楽は、彼のオリジナルの言葉があってこそのものである。

小椋氏は自身の生きている価値を「創造的であること」に置いている。それは自殺をしようと考えた高校生の頃から今に至るまでの一貫した自己概念である。銀行員であることと音楽をやることを同心円と表現するのも、若い頃から一貫している。まるで日記を書くように歌をつくる。理想の姿は「言葉が全部『歌』であり、仕草が全部『舞』である」ということ。日常生活を生きることがそのまま創造的活動であり音楽でありたいと考えているのだ。

そのため、1曲をつくるための時間は3時間という日々の生活のなかにある時間であり、それを約40年にわたって続けているのである。またそうありたいという強い思いが、40年間の変わらぬ習慣を支えていると言えるのだろう。

キャリア論を研究するヘブライ大学教授のシャミール氏は、人間は目標志向的であるだけでなく、自己表現的（self-expressive）であり、自己の一貫性を維持し増進することに動機づけ

られる、という論文を発表している。小椋氏のキャリアもまた、自己表現的であり、一貫性を維持することが生きる動機づけになっているように思える。

小椋氏は言葉についてこう語る。「言葉には善し悪しという思想が入っている。それをそのまま受け入れたのでは、ただ他人の人生をなぞっているだけにすぎない。一度言葉のルールを壊して、自分にとっての意味を再構築してこそ自分の言葉になるのだ」と。

言葉を壊す、再構築する、それが歌になる。このプロセスが創造であり、表現であり、彼の考える「生きている意味」なのであろう。

